

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	山岳部報 : 各部々報
Author(s)	前田, 富士雄
Citation	龍南, 2 2 3 : 8 2 - 8 4
Issue date	1932-12-03
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/7100
Right	

も實力を有しながらも選手の事故により、空しく旗をまいて歸らなければならなかつたのであつた。又一年。汗と膏の精進は續けられた。冬の休暇も春の休みも、我々にとつては休みではなかつた。白い取衣には眞赤な血がにじみ出し、摩擦にたへかねた耳は眞赤にはれあがつた然し連けられるものは、不斷の苦闘であつた。龍南の名譽の爲に、龍南を愛するが故に、この苦しさにもたへしので來た。七月が來て試合が近づいた頃には、面やつれした顔に、ぼう／＼とのびた頭髮や鬚の間から目許りぎよろ／＼光つてゐた。

七月十三日、十時校長を始め、部長並びに多數の校友の激勵を後に、西部豫選の地福岡に向つて上能本を出發した。「今選ばれて我は行く、必勝の意圖胸にあり」の部歌の一節が強く我々の頭にひびいた。

かくして我々は、昨日優勝校たる佐高を始めとして、九醫、同文、明專の諸剛を悠々と屑つて、三年目に遂に優勝の榮冠を取かへす事が出來た。熱烈なる校友諸兄の應援と我々の死もの狂の不斷の練習が遂に西部優勝校た

らしめてくれたのだ。

全國爭覇の檜舞臺に向つて我々は入浴した。「薩摩隼人の血に肥えし」の部歌と焼杉の下駄の響きは都人士を驚かした。七月二十三日中部優勝校たる松山高校と決勝の刃を交へたのであつたが、連日の奮闘に疲れ刀析れ矢盡きの必死の戦ひも効を奏せず遂に破れてしまつた。我々は相擁して泣いた。應援をして下さつたすべての人々に申譯けのない。

しかしとに角西部で優勝したのは一つの前進であつた我々はこれを土臺にして今一つの前進、全國優勝を譬ふ。夏休みが明けると直ちに猛練習を開始した。來年の七月を目指して。

(文責安藤)

山岳報部

前田富士雄

兎角龍南人は我山岳部に對して正しき理解を與へる事を遠慮し勝ちである。之は何によるか、惟ふに山岳部は

當然本質的に他の運動部とは相違を有するのである。山岳部には他の運動部に見る如き華やかな試合もなければ歡喜の手に受ける眞紅の優勝旗もない。人目に立たず隱遁者の如く都會を離れて山に入り地味な自己の立場を見出すのが山岳部である。之が動もすれば龍南人の我山岳部に對する認識不足を惹起する一大原因ではあるまいか現在の山岳部が如何なる情勢の下に如何なる軌道を辿りつゝあるかを明らかにし以て、この認識不足の幾分かなりとも開明せられるならばそれを以て満足するものである。地味ではあるが餘々として致々として培はれる我々の研究はやがて大きな實となつて現はれて來るものである。バツと開いてバツと散る他のスポーツの花に比べて之が山岳部の大きな誇である。便宜上左の如く分類して山岳部の現状を述べようと思ふ。

一、組織

以前には本校山岳部を指導するものとして山岳部員たりし先輩により組織せらるゝ龍南山岳會が存在し互に密接な關係を有しながらも名義上は二個の團體に別れて居

たのである。この不備缺點を補ひ、より盛んなる活動を續けんがために昭和六年四月兩者を以て一体となす蘇友會なるものが誕生したのである。之によつて現在に於ては先輩現役相呼應して容易に仕事を遂行し得るのであるかくの如く先輩との連絡の完全なる點は實に我山岳部の誇りである。

二、會報及部報

蘇友會は會報として雜誌「こだま」を持つ。「こだま」の目的とする所は蘇友會員各自の研究の對内的發表機關である。之によつて或は相互研究を助長し或は會員の親睦を企圖するものである。之に對して對外的發表機關としては「五高山岳部報告」なるものを持つ。元來山岳部として對外的發表は多年考究せられた問題であつたが先秋の大演習を機としてその第一輯を發行したのである。之に含まるゝものは主として東阿蘇（高岳及根子岳）に關する研究と日、豊、肥三國々境の連峯に關する研究である。後者は未だ完全なるものでない。近く第二輯が發行せられる筈である。

三、位置

我山岳部は地理的に見て甚だ中央山岳界より懸隔してゐる。之は我部に取つて一面甚だ不利な事實であるが其にも増して他面に甚だ幸福なる結果を招來してゐる。即ち殆んど手を染められて居ない九州獨特の山岳に關する研究言はば九州山岳界の開拓と言ふ一大任務が我部の双肩にかけられてゐるのである。

四、研究對象

然らば我々は何處を研究對象として活動しつゝあるか之に就て左の如く現在の部の方針としては大別し得るのである。

A、高岳及根子岳に關する綜合的研究

B、日、豊、肥三國々境に於けるバイオニヤ、ワーク

の完成

Aはロツククライミングの方法による岩場を對象としての尾根或は谷の研究である。現在に於てはこの研究も大略完成を遂げ實に我部は此方面に於ける權威と目され開拓者としての任務を果し得たのである。

Bは日向、豊後及肥後の三國々境の連峯即ち祖母、傾五葉、加納、日隱、大崩、桑原等の連峯及びその間に存在する谷或は脊梁山脈を指すのである。之等の地方は最も原始的な未知の地方でありその研究も甚だ困難であるが部員の熱心なる活動により着々片附けられて行きつゝある事は誠に喜ばしき事である、

尙この二つの研究對象の外に屋久島の研究も行はれ、或は又遠く臺灣遠征をも計畫されつゝある。

以上甚だ拙文であるが大略山岳部の現状を述べ得たと思ふ。

最後に山岳部は則ち全龍南人の山岳部である事を考へられて出来るだけ利用せられん事を祈つて止まない。

陸上競技部

本年七月二十三・四日兩日全國高等學校大會は明治神宮競技場に於て、壯嚴なる入場式について行はれたのであります。我々は猛練習から充分回復したか否かも分